

小麦通信

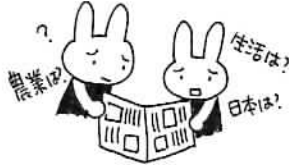


発行：NPO 法人 北海道食の自給ネットワーク
〒065-0015 札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内
TEL：090-2818-5502 FAX：011-789-8890



TPP問題と農業、そして私たち

—「亡国」への一撃TPP？ 年金・医療保険までもが—



北海道大学大学院農学研究院 教授 飯澤 理一郎

「交渉参加に向けて関係国と協議に入ることにした」。野田総理が去る11月11日、APEC首脳会議に旅立つに当たって下したTPP参加問題に対する回答である。TPP交渉に参加するのか、しないのか、実に判然としない。肝心なことをはっきりさせないで、関係国と何を協議するのであろうか。そんな状態で、関係国はまともに相手にしてくれるのであろうか。不安、不信の念は尽きない。

《「民は寄らしむべし、知らしむべからず」か？ ～不十分過ぎる情報提供～

こうした訳の分からない“玉虫色”の回答を引き出すために民主党「経済連携プロジェクトチーム」は何時間もかけて議論を重ね、“慎重判断”との提言を取り纏めたのであろうか。政治とはそんなものと居直ってしまえばそれまでであるが、事「平成の開国」「国の形を変える」などと言う程の重大事に臨んで、そんな曖昧な態度が果たして許されるのであろうか。もし、玉虫色の表現は慎重・反対派に対する配慮に過ぎず、“真意は参加”であったとすれば、それは党内の議論・意向に対する裏切り行為と言うしかなく、党名の“民主”が号泣しようと言うものである。

さて、TPPが世間の耳目を集めてから早1年有余。この間、我々国民には如何ほどの情報が提供されてきたのであろうか。政府・民主党は折に触れ「国民の理解を得て判断する」とか「国民への十分な情報提供、幅広い国民的議論が必要」とか言ってきたはずである。さぞかし溢れんばかりの情報が提供されてきたと思いきや、“言うは易し、行は難し”なのであろうか。鳴り物入りで

スタートした「開国フォーラム」も2月のさいたま市の1回だけ。提供された情報も新味のない、古くさいものばかりであった。以降、東日本大震災対応云々を理由に再開しようとする気配すら全く感じられない。ならばホームページ上でどんどん情報を開示しているのかと思いきや、そこにあるのは陳腐な情報ばかり。こうした状況を見ていると、もしかして民主党の本質は“民(=国民)は寄らしむべし、知らしむべからず”なのではないかと疑いたくさえなるほどである。これでは国民の理解など到底、得られるはずがない。むしろ、“心配ない”“しっかりと手当をする”などと言われれば言われる程、疑心暗鬼。むしろ心配・不安の念が増すのは人間の常と言うものであろう。

こうした状況を反映してか、TPP反対の声はこの間、農林水産業関係者はもちろん、地方自治体関係者、都道府県・市町村議会、諸消費者団体や医師会などにも急速に広がってきている。一、二、例をあげれば、44都道府県議会、1,425(全体の8割程度)市町村議会が反対ないし慎重判断を求める意見書・決議を採択し、JAが呼びかけた反対署名にも優に1千万名を超す人々が署名を寄せているのである。

《詭弁か？“ルール作りに参加”“有利な条件”》

さて、冒頭触れたようにAPEC前に“訳の分からない”決断をしたのは“ルール作りに参加でき”“有利な条件を獲得できる”可能性があるからだと言われる。本当にそうした可能性は残されているのであろうか。現行9ヶ国による交渉は既に1年以上前から始まっていた。以来、9ヶ国はわが国の大震災に“哀悼の意”を表して、APECで

野田総理が態度表明するまで交渉を中止して待っていてくれたのであろうか。そんなことはまかり間違ってもあり得まい。“APEC時に大筋合意、来年6月に正式合意”などとの報道もなされる中で、交渉は相当進展し、交渉の枠組み・ルールなどは相当程度に出来上がっていると見なければなるまい。“ルール作りに参加”どころの騒ぎではないのである。“出来上がった枠組み・ルールを日本側に説明し、受け入れさせるために”数ヶ月も要する“事前協議”をアメリカは要求し、最短3ヶ月はかかるとされるアメリカ議会での承認を求めていると読むのが、真っ当な読み方であろう。

さて、その枠組み・ルールとして、どんなものが想定されるであろうか。まず、現行のTPP交渉が全くのゼロベースからスタートしたのではない、「2015年までに交易の全分野に渡って完全自由化する」とした4ヶ国による元祖TPPがベースになったものであることを明確に確認しておく必要がある。それとともに、交渉中9ヶ国がこれまで結んだEPA・FTAの自由化品目率(ここで言うこの品目とは関税品目数であり米は34、麦は75、砂糖は56、乳製品は149等に細分化)が96~100%の高きに達していることは決して軽視されるべきではない。“枠組み・ルール的大幅変更”などとの話は全く聞こえてこないから、こうした“完全自由化”の枠組み・ルールは変わっていないと見なければならぬ。

翻って、わが国が締結したEPA・FTAを見ると自由化品目率は84.4%~88.6%にしか過ぎない。わが国は約850の農林水産品を始め約950品目(関税品目数の約1割)で関税を撤廃していない。如何に交渉したとしても、そこまでの例外が認められることは決してあるまい。政府・民主党が何と言おうと、TPP参加はほぼ全品目に渡っての“関税ゼロ水準”での自由化を、「平成の開国」と称されたように“わが国の経済的国境の溶解”を覚悟しなければならぬのである。

《TPPは我々の生活に直結する問題》

“物品貿易”の完全自由化で最も甚大な影響を受けるのは農林水産業であり、農山漁村たること言うまでもない。農林水産省の試算によれば米の90%、小麦の99%、小豆の71%、甘味資源作物・澱粉原料作物の100%、牛乳・乳製品の56%、牛肉の75%、豚肉の75%などの生産が失われるとされる。また、北海道の試

算によれば、農業生産額で5,563億円、関連産業で5,215億円、北海道経済全体で2兆円余の減が見込まれ、17万人余の雇用が失われるとされる。実に甚大な影響であるが、しかし、影響はそれだけに止まるまい。米などの土地利用型作物の大方を失った日本・北海道農業が、野菜や果樹、花卉などの集約的作物に特化しつつ生き長らえていけるとはとても思えないからである。とすれば、TPPは政府が何と言おうとも、ますます脆弱の度を深める日本農業への最後の一撃となる危険性を持っていると見なければならぬ。それは同時に国土の荒廃、景観や多面的機能の喪失などにつながり、“大通公園に熊”などと洒落にもならない鳥獣被害の広範化・常態化につながってもおかしくない。

しかし、そればかりではない。TPPは決して物品貿易だけではなく“全分野”に渡る自由化の話なのである。全分野となれば、当然、医療保険や年金や郵政(貯金や簡保など)、政府調達、労働市場の開放、食の安全性確保問題など広範な問題・領域が含まれていると考えなければならぬ。事実、TPPの交渉は市場アクセスを始め政府調達、サービス、衛生/検疫、規格/認証、投資、労働、環境など24作業部会で行われており、既にアメリカ側からわが国へ混合診療の全面解禁、薬価の自由化、簡保やJA共済などの優遇措置の撤廃、政府調達分野の海外企業への開放下限金額の引き下げ、輸入牛肉の年齢制限の緩和などが非公式ながら求められているとも言われる。更に、年金の自由化や労働市場の開放なども何時、議題に上ってくるかも知れない。

こう見てくると、TPPは決して「農業対非農業」「1.5%対98.5%」などに矮小化して捉えることの出来る問題ではなく、我々の健康や老後の暮らし、食の安全・安心など、広範な領域に直結する優れて全国的な問題として捉えなければならぬのである。国土は荒れ果て、年金も医療保険も何もかも“自由化”“民営化”され、経済格差が加速度的に拡大する社会。それが「国の形を変える」の終点だとしたら泣くに泣けない。それはわが国の発展などでは決してなく、まさに「亡国への一撃」の文字が相応しいのである。



国民的な
問題だよ!



No! なのだ!

生産者の 想い



農業に携わって40年、長い様な短い様な



岩見沢市 農業 滝谷陽一

どちらかと言えば技術系？の私は、人(消費者)と向き合う事もせず、ただ作れば買って頂ける米、麦、大豆の効率的生産みたいな事に重点を置き、この仕事を続けて来ました。そんな中、JAの薦めもあり、キタノカオリの生産を始めて間もなく小麦トラストに参加する事と成りました。はじめは戸惑いもありましたが、何度かお会いする内に親しみを感じ、又、消費者の方々の食に対する期待、生産者に対する気持ちを知る内に、それまでの自分の生活の為だけの生産から、この人達の笑顔の為にももう少し頑張ろうか、どうやって期待に答えようか等、新しいやりがいを見出しました。又、恥ずかしい話ですが、それまで自分で作った小麦を自分で食べた事はありませんでした。トラストがきっかけとなり、今では製粉してもらってパン、ラーメンを作る等、楽しみも増えました。

皆さんご存知のように、キタノカオリや春小麦は穂発芽し易く、天候に左右され易い品種ですが、農業を続けられる限り、皆さんの事を思い出しながら、これからも作り続けたいと思います。

この時期、外の作業もおおむね終わり、いつもの様に機械の格納整備をしたり、来年の作付け計画を立てたり、趣味に興じたりと変わらぬ生活を続けていますが、ひとつ違うのは、TPPの事です。賛否両論ありますが農業に関しては良い話は少ないようです。40年右肩下がり？の中で営農して来ましたが、これ以上は無理かな？かつての炭鉱の様に成るのかな？と、不安は尽きません。が、この3年間の皆さんや関係者の方々との出会いを力にもう一頑張りして、後継者を育てて行きたいと考えております。

自給ネットの皆様には、そのポリシーを益々広めていただき、応援の程宜しくお願い致します。



メーカーさん紹介

今回はいつもの取材とは違い、メーカーさんご自身にトラストへの想いを書いていただきました。

(株)秋月 代表取締役 品田 憲宏 (札幌市)

昨年より小麦トラストに参加させていただいております。

弊社は和洋菓子を製造し、北海道内の量販店などに卸しております。現在、量販店などでは食品の低価格化が進み、輸入食品が氾濫しているため、会社の規模から大手メーカーと同じ土俵に上がることは大変難しい状況になっております。そこで商品の差別化を図り、低価格商品とは一味違った商品の製造を目指しております。例えば原料などについても、使用できるものはなるべく北海道産、国産を使用し、オートメーション製造にはないひと手間を加えることでこだわった商品を製造しています。

昨年より参加させていただいて感じることは、小麦以外の食材もなるべく添加物などを使用せず、産地のはっきりした原料を使用し、全員でその素朴な味わいを得ようとしているように思いました。添加物などを使用すれば食感もよくなりますが、やはり無添加のほうが小麦などの素朴な味わいがでるのではと考えます。道産小麦などを使用するとどうしても固い食感になりますが、昨年もトラストのパン、麺類など食させていただきました、米国産などの外麦を使用した製品とはかなり違うので驚いた記憶があります。食の安全を考えると出所のはっきりした原料で作った製品を食べたいと言う消費者の気持ちはよくわかります。普段は外国産などを使用した原料の製品規格書などを取り寄せ内容を見ると、なるほど世界一規格が厳しいと言われる日本向けの原料ですから、“えっ”という原料、添加物などはできませんが、安心なのは国産かなと、思うところはあります。

最初にも述べさせていただきましたが、今後も添加物をなるべく使用しないおいしい和洋菓子を目指して日々努力したいと思います。2年間の短い間でしたが、会員の皆様には大変お世話になりました。





人をつないだ「キタノカオリ」と歩み

三島製麺所 工場長 三島 隆 (岩見沢市)



小麦トラスト 10 年の活動が発展的解消と聞き、大変残念な思いしております。これまでのトラストに関わった思い出を少々述べさせていただきます。

小麦トラストにメーカーとして参加するようになったのは、JAいわみざわの西飯さんを通してでした。西飯さんとは、スキー仲間(西飯さんのスキーの足前は天下一品)として知り合いました。ある日、西飯

さんから「キタノカオリを使ってみたいかい?」と言われ、私が「何それ?」と応じたのが始まりでした。当時はまだ輸入小麦で作った商品の方が白くて良いと自負していました。が、キタノカオリを使いラーメンの試作試食を何回か重ねると、何か今までとは違う麺が出来上がり、キタノカオリは強力粉の中でもグルテン、甘味が絶妙なバランスの小麦であると思いました。又その時期、偶然に岩見沢のホテルのチーフから「生パスタを作ってほしい。それもキタノカオリで」と言われたのが、生パスタ作りの始まりです。苦労話ではありませんが、毎回試作を手打ちで作業し、OK が出たのは、ひと月後でした。体はもうボロボロで、今でもそのときの辛さを思い出します。もう一人、JA いわみざわの瀬尾課長(現在岩見沢市農政部出向)は、私どもにとって掛け替えのない存在です。イベントの関係は、すべて瀬尾課長にお世話になっており、頭が上がりません。

そんな中での小麦トラストの皆様との出会いでした。キタノカオリ生パスタをトラスト製品の仲間に入れて下さったことを大変光栄に思います。弊社は業務用麺を製造しているので、いままでは直接消費者の声を聞くことができませんでした。しかしトラストに参加してこれまでに色々なアンケートを見せてもらい、ただただ「反省」と「希望」を発見する次第であります。

このように西飯さんや瀬尾さんから始まり、小麦トラストの皆様方と出会えて、私にとって大事な人達が広がりました。小麦トラスト運動は私にとっての発展の過程でした。有難うございました

最後に、これまで支えてくださった皆さま方に感謝し、これからの発展をご祈念申し上げます。



2010 年度アンケートから ~1年間のトラスト活動に参加して~

アンケートを通して昨年 2010 年度トラスト参加者の皆様からいただいたご意見や思いは、製品に関しての厳しいご意見も温かいメッセージも各メーカーさんにお伝えし、今期の製品に反映されています。以下に回答をいただいたトラスト会員さんのご意見や感想を列記します。

★産地見学交流会やパン作り講習会を通じた生産者やメーカーとの交流について

- ・生産者の皆さんの説明が丁寧で楽しかった。畑に入る貴重な経験。良い企画なので他の人にももっと参加して欲しい。
- ・小麦畑を見たり、生産者の方とニョッキを作ったり楽しかった。もう少し話し合いが活発にされるといいと思った。
- ・パン作りに参加。作り手の思いを知り、パンを見るとメーカーさんの気持ちが伝わってきます。
- ・いずれも不参加ですが、通信でその時の交流が知れて嬉しいです。

★トラストに参加して北海道農業・食生活について感じたこと

- ・生産者が大変苦労されている、そんなことに思いをはせる機会をいただけたと思います。
- ・農業に対し自分は何が出来るのか。少しでも考え、小さな口コミでも広げていけたらと感じました。
- ・「食べたものが自分になる…」という気持ちで食事をしています。農業は本当に大切です。
- ・農業は今いろいろな難しい問題を抱えています。それぞれ立場があり、小麦通信で勉強させていただいています。



★生産者・メーカーさんへのメッセージ

- ・2年連続の不作。月日をかけて育ててきたのにと思うと胸が痛みました。
でも何があろうと、TPPが何だろうと食べ支えて応援していくことに変わりはありません。
- ・天候に左右される小麦は生産するのも大変だと思います。地道に応援して行きます。生産中止せず続けて下さい。
- ・道産の小麦のお菓子・麺最優先で買っています。頑張ってください。
- ・良質な小麦をいろいろな形に製品化していただけることに感心すると共に感謝しています。
消費者だけでは発想できない製品の開発にこれからも期待しています。
- ・平成 14 年にこのトラストに参加してから、随分「道産小麦使用」という文字を店頭で見かけるようになりましたが、まだまだです。これからも頑張って応援しましょう。



★トラストへのご意見ご感想をお寄せください。 FAX011-789-8890 Eメールinfo@jikyuu.net